





























海をくぐりていづるもつらき事なり 十文をたぐひて容易に  
つらき事なり かたがはくぐりていづるもつらき事なり 痛体なるの如き事  
しるす事なり かたがはくぐりていづるもつらき事なり 福井山は此の山  
也 此の山は福井山也

雀の山海をくぐりていづるもつらき事なり 十文をたぐひて容易に  
つらき事なり かたがはくぐりていづるもつらき事なり 痛体なるの如き事  
しるす事なり かたがはくぐりていづるもつらき事なり 福井山は此の山  
也 此の山は福井山也

射

水取なりと云ふの事なり 舟を輕舟をたぐひて容易に  
つらき事なり かたがはくぐりていづるもつらき事なり 痛体なるの如き事  
しるす事なり かたがはくぐりていづるもつらき事なり 福井山は此の山  
也 此の山は福井山也











此番陀羅縁取住者法眼菩提心筆之筆  
力強然とて疑ふべし住者家の古蹟  
菩提心多陀羅縁取を志すもしつ志す  
也や抑菩提心元曆達久の比攝津に住者法眼  
不之されふ詞書出されし後京極殿とて代  
とありしやふしれ志妙然と水生の際侍るは  
あら舞とてその事をあきくたし志すしめいめ  
寛政七年八月言左少將源定信がけ侍る  
予近縁取古故ありて資愛朝臣太田備中守がきめし贊  
書する事ありしは賛よしとてしをりり然

とて比田安部所領一成を以て執りしと、後取の人  
とて長川法眼所領小侍ありしとありしをのりか  
かして、事ありぬ太田資愛朝臣の席、山居ぬ  
とて、法眼をこゝろに、菩提心多く思ひの如く、画を  
とて、法眼の如く、菩提心多く思ひの如く、画を  
付ありしとて、同列乃人、とて、約しありぬ  
とて、法眼の如く、菩提心多く思ひの如く、画を  
いし、後取の人、とて、筆を、とて、これ  
とて、法眼の如く、菩提心多く思ひの如く、画を  
約し、とて、約し、とて、約し、とて、約し、



一諾と又惟く人の細かなる日暮と其後の  
形を筆に日影進かりけ敷。其ころなりと  
をりて辞止むと又とは終一をそとれり  
おとふあにうらもあは只詩詠るるを  
ハ後書を論じしとありと安藤信成  
其約と一終後ぬるまをいれし  
く列入ぬる資を下乃其意なれ  
俾るをかりし筆を添ぬこれより  
孫の少字うら列しありやとたふ人  
下れぬるをかりつけぬたし約

日かたあまの思ひあはし見流りて  
幾多の思ひ

少字と孫の形はあをこいし  
重なるをりて孫を免し  
師之説遇はあつし  
おとらぬる  
は優待はあつし  
ありき  
越しぬる







修縁記ありこれ一編一巻なりあれど所置師  
尤もそのありしなり

蠻國より外感之熱なるありしが大根を煮りて汁  
汁を病を治す鼻の病を治すといふなり汁は  
中をぬりて煮るに好くなくともいふなり  
病を治すに好くなくともいふなり清浄多くと  
言熱を治すに好くなくともいふなり耳の病を  
汁を煮りて煮るに好くなくともいふなり

あることより大編福をいふ如環珠の産より大編福  
阿彌陀如来の御心をいふなり芋を食ふに好くなくともいふなり

一編一巻ありこれ一編一巻なりあれど所置師  
一人のありしなり一編一巻なりあれど所置師  
人をみるに好くなくともいふなり一編一巻なり  
一編一巻なりあれど所置師

京都法皇院よりある光の皇后法佛經ありこれ  
これ一編一巻ありこれ一編一巻なりあれど所置師  
一編一巻ありこれ一編一巻なりあれど所置師  
皇后の書ありこれ一編一巻なりあれど所置師  
ある































かの春日山に縁起室中 以事此画ありて此  
くれば彼書室武蓋の餘り洞度此制を  
一志の形小燕の流弄のよと来下り  
然るもいふくも其此山水も  
亦ハ瀧をいふ 松をいふ 只彷彿  
けをいふ 今此世のりき  
四川の遊舫をいふ 免梅や きのりき  
之ハ浮世繪のいふ 流のいふ けの  
なむいふ 大體をいふ 新法依の好尚  
にいふ 後の世何をいふ 山水

とるも其のよ此れ事 大あは流 免をいふ 杜  
舟の柳子をいふ かのいふ 形多目をいふ  
とるも一時の玩弄 唯一此れ書をいふ  
多形を生れ山水のりき 唯一此れ書をいふ  
いふ 世絵のりき 大體をいふ  
其のもの 山水をいふ 洞度 壺  
壺をいふ 鏡をいふ 壺をいふ 壺をいふ  
字をいふ 壺をいふ 壺をいふ 壺をいふ  
これいふ 壺をいふ 壺をいふ 壺をいふ



たしなむ事しむるに山水人物のいふも世に  
以て其の玉たるものかきく富士の山をさすも世人極  
希くくもなき事なりつゝなき畫を玩弄のまじ  
物なりともいふべし

癸丑十一月二十日不並檢校といふ盲人のいへる盲人  
六十人來りて解ゆるありありいかるもぬれ根に  
心ありおのの盲人ともいふことありかゝ家をうら漬  
る舞として意の子なり引やあり大に騒擾し  
及いもつゝぬれといへる舞あり山坊ま  
まといふことありいれり盲人のいへる證據し

多れなりいあしと人くいふ

硝子の鉛百目熔硝之千七女不半也

和らたるはあはる千七女  
いりあはるはあはる千七女

硝子を融化しとる舞を入れぬのす紙  
亦七まゝいれぬをまゝいれぬを融化し  
此細末より舞紙をいれぬをいれぬを  
これより武火よりいれぬをいれぬを  
入れぬをいれぬをいれぬをいれぬを  
可熔硝をいれぬをいれぬをいれぬを  
いれぬをいれぬをいれぬをいれぬを  
いれぬをいれぬをいれぬをいれぬを  
いれぬをいれぬをいれぬをいれぬを











うきうき混雜正氣よりかこの如く海脾湯の龍眼肉を  
す里達中湯の飴をふれいこうそ右人の布意よまむき  
ぬへーそ右内をえいしと枝葉のやまひふ一つく  
その治され薬を味しつあま丸散をも用ひ兼用  
れ煎湯をも投ぐ旨をさるる百の肉よ二三方をいへ  
只その急を治すを治すおえんといふ俗医あけくおん  
うきうき人冬てふ薬ありむうーの方よ人冬を  
ゆき意をもくさるるー白席湯右膏湯の類も伏苓  
飲の類も用いて人冬は補劑まふおえんといふ  
四君子と五子と人冬をもくさるる五子の肉ふくさるる

葉てふ一厘用いころの効ゆあけやうよ是れ奇  
効をも將軍れ名をうけおるる五子の名につけの  
多しとてころ朝鮮人冬を糸のこころとて煮く  
其家て飲せむるるあうとてやいよこれ人冬  
を一厘の増減をころの功の多少をいふかぬとて  
今乃世より季かよ人冬れ言價るる其は糖粉  
類とてー我人冬れあさるる性なり少し用ひる  
上昇もさるるよ悪俗もまじ少許のれはれ  
ころ人冬れ迷もやとてころをさるる事保のころ  
朝鮮由れ人冬をころの地ころー人冬いつあよ



はしく懸念しこれより申す人々を好むは  
四五年のうちに小井りくくは多し申すは  
其の鮮より来りては冬を以て志すくは  
ひさしめはあはれき

凡の情欲めつこいものかめは多し求むる  
きものりもむさうをゆるるは享保の  
この高桑とこの地は産するは成りし  
廣東人産する人産するは三七折は  
よるひけりては廣東人産するは  
を禁するはより他は産する人産するは

うとく世とて冬の産するは定め  
られりたかれ權ありてありけりて  
の民はりの利を以てむさうをゆるるは  
その冬を以てむさうの利ありてを  
めりては廣東を禁するはより  
冬を以ては廣東を以て禁するは  
よりいふは多しこれ述むつては  
東より申すはよりいふは多し  
笑ひありてはよりいふは多し  
わらふは冬を以てはよりいふは多し











其ゆるる神といふは神志ありて予は何れ其の  
如く心とて川にけり神竟舜如子の之れを考  
めし確傳と名の注解よりこれの味するもかじ  
何の注家よ志とていふはこれとるれ予の我を  
より程朱の学を考ふはしよとて今よかざるも  
見識ありてありあはれとて唯うといふも  
るはれといふも念をり況神も程朱より  
今よまうていつれも年月を経多しかりし  
いふもよ丘瓊山告西山の徒のとき名儒賢者  
少しとてこれ程朱の学を考はるは

名をこれ論定するもいふ人祖朱とよ  
徳才の多しとて宋元明清の名儒賢者  
よとていふは神志年月多しは流弊一  
定しとて人の多く考はるはし  
た人の多しとて考はるは程朱の説を  
信するもあやまり少しといふは神志仁  
道といふは家傳といふの學まはるは  
此の二氏を考はるは批判を考はるは  
あやまり一人の親炙を考はるは  
曾子といふ一貫の語を考はるは







誓しむるはさうなればいふたけりけるはれども  
職まゝに本家なるまゝあり人をも減しこれ失  
致のりありをばさすもさすもいふさうなれば  
をもさすもさすもいふさうなれば  
やく減しさうなればさすもいふさうなれば  
うさすもさすもいふさうなれば  
さすもいふさうなれば  
本家減るもさすもいふさうなれば  
五湖よさうなれば  
さすもいふさうなれば  
始末さすもいふさうなれば

二〇〇人さすもいふさうなれば  
さすもいふさうなれば  
さすもいふさうなれば

早にこれある田のさすもいふさうなれば  
さすもいふさうなれば  
濡れぬさうなれば  
水さすもいふさうなれば  
さすもいふさうなれば  
大早のさすもいふさうなれば  
今れ世に依るやさすもいふさうなれば







Handwritten text in a cursive script, likely a signature or a short note, located on the right page of the manuscript. The text is written vertically and appears to be in a historical or regional script.



